

ワールドカフェの対話過程における“席替え”の影響に関する研究 Research on the impact of "Move to Other Tables" on the dialogue process in the World Café

田坂 逸朗[†]
Itsuo Tasaka

[†] 青山学院大学大学院社会情報学研究科博士後期課程
Graduate School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University
tasaka@hf.rim.or.jp

概要

会合のプログラム「ワールドカフェ」において、その特徴である成員の途中組み替え（“席替え”）が、どのように対話過程に影響を与えるのかを分析した。結果、席替えで、前の談話の体験を伝える機会がもたらされ、そのことが主張を後退させ、創発的な応答を増やしめるということがわかった。また、社会実践としてのワールドカフェの検討では、終盤までに「意見共存」の状態がつくられることで、さまざまな目的に合致した成果が得られると考察した。

キーワード：ワールドカフェ，“他花受粉”，合意形成

1. はじめに

本研究の目的は、ワールドカフェにおいて、その特徴である成員の途中組み替え（“席替え”）が、相互行為をどう変化させ、どのようにその対話過程に影響を与えているかを明らかにすることである。くわえて、社会実践としてのワールドカフェの目的と、その“席替え影響”がどう連関するのかを検討する。

ワールドカフェは、会合のプログラムのひとつで、その出自をシンポジウムの議論手法にもつ。Brown と Isaacs が 1995 年に創始し、世界的な普及が始まった (Brown & Isaacs, 2005)。これまでワールドカフェ研究はおもに組織学習や教育学の文脈においてなされてきたが (Brown, 2015)、社会実践においては、組織開発や教育にとどまらず、市民共同、知識生成 (イノベーション)、課題解決、合意形成など明確な成果目標をもつものから、対話やコミュニケーションなどの機会そのものを目的とするものまで、その援用は多岐にわたっている。

筆者が実践者として、援用を担ってきた現場での実感からするならば、目的が多様であるにもかかわらず、ほぼ同一のプログラムでその成果が概ね現出できていることは、意外に感じられる。仮説のひとつは、プログラムの特徴である成員の組み替え、すなわちラウンドごとの席替えが、相互行為に変化をもたらし、対話過程に影響を与え、目的と成果の合致が達成されているので

はないかということである。しかし、先行研究は、援用の要諦を検討した当為論的研究や事例の研究が大半で、こういった機序に関する研究は極めて少ない。たとえば、O'Connor & Cotrel-Gibbons(2017)は看護師のインターン教育に援用した事例の研究で、ワールドカフェの留意点を「hospitable space (もてなしの空間)」「questions (たいせつな問い)」「contribution (貢献)」「collective discoveries (集合的な発見)」の4点と考察し、後継する実務者に援用上の便を供している。中西・高階 (2017) は、勤務薬剤師の実務への援用から、ワールドカフェ参加で得られた効果に関する因子は「知識獲得」「思考深化」「発言機会」「視野拡大」の4つの因子であるとして、総体としての効果を分析している。大規模会議手法のハンドブックである『The Change Handbook: Group Methods for Shaping the Future』(Holman et al., 2007)においても、ワールドカフェの目的や技術的なノウハウや事例はまとめられているものの、ワールドカフェの何がそれを達成させる要因であるかの、機序の記述はない。

本研究では、実際のワールドカフェを対象に、機序研究の方法を模索しつつ、相互行為を中心とした機序の記述を目指し、かつ、目的と影響の連関の検討を行う。

2. 方法

本研究の目的である、成員の席替えが対話過程に与える影響の検討のために、二つのフィールドを分析の対象とした。広島県北広島町の「田原温泉再生を考える会」の第2回会合で援用されたワールドカフェ (2020) と、福島県いわき市の「対話と学習のワールドカフェ」(2020)のワールドカフェである。この二つのワールドカフェはそれぞれ目的が異なる。「田原温泉再生を考える会」は、休館となった地域の温泉観光施設をめぐる、地域と町役場、および地域活性化を目論む地域活動の担い手が集う会合で、対立のさなかに施設の再建築を模索する場となった。「対話と学習のワールドカフェ」

は、東日本大震災後の復興の活動を担ってきた、おもに福島県の活動家たちが、復興支援活動のこの約10年間をふりかえる場で、学習の機会として開催されたものであった。

ワールドカフェは、小分けにしたテーブルで、会話をラウンドごとに区切り成員の組み替えを行う。その全ラウンドの全テーブルの談話を、360° 全球型ビデオカメラとICレコーダで録画および録音し、談話分析のためのトランスクリプトに起こし、その発話と応答の相互行為を分析した。一つめのフィールドの「田原温泉再生を考える会」のトランスクリプトから分析を組み立て、そののち、ふたつめのフィールドの「対話と学習のワールドカフェ」で同等の結果が得られるか検証した。本研究は、青山学院大学研究倫理審査委員会の「人を対象とする研究に関する研究」の倫理審査の承認を得て実施した。調査にあたっては、調査フィールド1、調査フィールド2ともに、主催者および参加者に、学術調査に関する了解を得た上で、倫理とプライバシーにじゅうぶんに配慮し、かつ、原則、データは公開可能という合意のもとにトランスクリプトなどの事後作業を行った。開催場所、開催関係団体等、枠組みとなる名称は公開するものの、参加者の実名は表出させないよう表記には配慮した。なお参加者等個人名は仮名(アルファベット記号)とし、発話中に引用される個人名も仮名とした。発言中の地名、組織名、商品名等は、実名に準ずるものとして略称や愛称も含めてその発話の通りとした。

3. 結果

1. 分析 I

成員の席替えの対話過程への影響を検討するために、分析 I では、まず全発話をコーディングし、ラウンドごとの傾向を比較した。以下にその結果を示す。

第1ラウンドから第4ラウンドまでの、全6テーブル4ラウンドの発話数はターンごとにカウントして3501であった(表1)。

表1 発話ターン数

	第1ラウンド	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	合計
テーブル1	296	386	220	104	1006
テーブル2	178	221	48	65	512
テーブル3	83	77	156	26	342
テーブル4	199	128	48	63	438
テーブル5	124	285	145	48	602
テーブル6	243	252	37	69	601
計	1123	1349	654	375	3501

3501の発話は、以下のカテゴリに弁別される(表

2)。カテゴリ分けにあたっては、談話分析の先行研究を参考にしながら、ワールドカフェ分析に特化したものとなるよう分類をコード化した。

表2 発話のカテゴリ

コード	定義	例
1 主張提示	個人的な主張を先行させて意見を提示する発話	1-1-1-44. C: サウナつきのピアガーデン。ぼく的には、サウナしたい。
2 役割強調	意見内容よりも役割や立場を根拠にして論の確からしさを主張する発話	1-4-1-054. N: ボイラーがね、ネックです。もうね、漏れ漏れだったんです。元従業員なんです。
3 即時評価	他意見に対して隣接して即断的に評価を返す発話	1-5-1-104. R: でも、宿泊施設というのはなかなかむづかしいと思うよね、常に。厳しいものが。
4 短絡結論	発話の趣旨をじゅうぶんに展開して説明せず手早く結論化する発話	1-4-1-120. M: いちばん重要なことはやっぱりこの地元の人が、それをなんか、それを誇りに思っているっていうところがやっぱり。
5 情報訴求	質疑や投げかけ、もしくはその応答により客観的な情報を得ようとする、あるいは共有しようとする発話	1-4-3-017. K: どんちゃん騒ぎしよったんすか? 知りたい、どんな感じだったんか。
6 体験提供	新たに得た情報(アイデア)を、得た体験として共有的に提供する発話	1-6-3-035. S: いちばんはじめんとこにいたんは、ここに近いいんだけど、要は、この地域全体を、この野菜なら農家なんだから、地域全体をまあ、青空市場みたいな感じにしてから(中略)っという話も出よった。で、次のとこ行っただとこは、このクラウドファンディング。
7 創発連鎖	他の発話に肯定的にアイデアを追加したり進展させたりする未終結の発話	1-1-3-141. D: そう。屋根をつけんといけん。でもそれこそあの、テントみたいな簡易的なちよつとおしゃれに。 ※注: この発話中の「それこそあの」は、直前の発話にあったキャンプ場のテントのことを指しており、この発話は、川床に屋根を付けるならそれに、前出のテントというアイデアをあわせることを合成的に提案している
8 高次化	談話前には得られていなかった概念の新しい形成に関する発話	1-3-3-156. J: いやおれ、だけん、「そうはゆうても」ゆうって思うときに、「そうはゆうても」ゆうのは、だけん自分にあてはめたとときね、なかなかいかんけ「そうはゆうても」ゆう話、それを、はよ手放してね、できる人に向けて渡すようなね。 ※注: J自身がたびたび「そうはゆうても」「それは難しい」と他者のアイデアを否定する発話を産出してはいたが、この発話に至って、「そうはゆうても」という傾向を、自分こそが手放さなければならない、と自成的に俯瞰化した発話を産出している
9 その他	本題に入る前の確認などの調整や字面の疑問など、1~8に含まれない	1-6-2-055. P: 「陶芸」は、どんな字だっけ?

富田・丸野(2005)は、曖昧な構造の協働問題解決における思考過程の研究において、発話カテゴリ間の相関関係を分析するため、談話の生成パターンを、関与度、関連性、方向性の3つの次元から分類している(参与-自己精緻型、参与-他者集約型、応答型など)。藤本・大坊(2007)は、小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の研究で、会話の展開を、会話の進度に照準化した5つのコードにカテゴリ分類している(“トピックの開始”, “情報追加・発展” “抽象化・要約” など)。片桐他(2015)は、会話コミュニケーションによ

相互信頼感形成に関する研究において、相互信頼感構築過程の分析のために、関心擦り合わせと提案交換の過程を記述する目的で、対話行為を、合意形成および相互信頼感形成のために果たす機能に特化して、8つに分類している(関心招請, 関心導入, 提案提示など)。

これらを参考にしながら、9つめの「その他」を含む9つの「発話のカテゴリー」を設定した(表2)。テーブルでの発話は、主張を提示したり、もしくは役割を強調したり他意見に対して即時的に評価を表明したりすることを重ねつつ、ときには手早く結論化している。いっぽうで、情報を互いに求めたり、他のテーブルで聞いた話、語らった話を体験として提供したり、創発的にアイデアの合成を提案したり、高次化した新しい概念を提示することもなされている。

発話の傾向は、ラウンドごと異なり、段階的に変化している(表3, および図1)。会話が開始される第1ラウンドでは、主張を提示したり役割を強調したり、直前の発話を即時に評価する発話を行う傾向がみられる。途中のラウンド、第2ラウンドおよび第3ラウンドでは、アイデアや情報など談話の体験を提供する発話、共有する発話が割的に増加している。最初のテーブルに帰還しての最終のラウンド、第4ラウンドの談話は、体験した談話の提供と創発連鎖の傾向がより強まり、俯瞰した高次の概念化に至る発話もたびたび産出されている。

表3 ラウンドごとの発話の傾向

発話カテゴリー	第1ラウンド	途中ラウンド		第4ラウンド
		第2ラウンド	第3ラウンド	
1 主張提示	253	174	97	11
	22.5%	12.9%	14.8%	2.9%
2 役割強調	86	96	28	4
	7.7%	7.1%	4.3%	1.1%
3 即時評価	171	137	60	8
	15.2%	13.3%	10.4%	2.1%
4 短絡結論	36	56	20	6
	3.2%	4.2%	3.1%	1.6%
5 情報取得	68	107	43	24
	6.1%	7.9%	6.6%	6.4%
6 体験提供	2	66	68	61
	0.2%	4.9%	10.4%	16.3%
7 創発連鎖	118	208	141	127
	10.5%	15.6%	21.6%	33.9%
8 高次化	5	14	21	41
	0.4%	1.0%	3.2%	10.9%
9 その他	334	426	162	60
	29.7%	31.6%	24.8%	16.0%
計	1123	1349	654	375
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

発話の傾向だけでなく、相互行為として隣接する応答をみても、傾向は最初のラウンドと最終のラウンドで大きく変化している。とくに、主張提示に即時評価が隣接して談話が展開するパターンと、主張提示に短絡結論が隣接して談話が展開するパターンは、最初のラウンド(第1ラウンド)では、計21例みられたが、最

終のラウンド(第4ラウンド)では計1例であった。かわって、第2ラウンド以降に産出される体験提供に創発連鎖が隣接して展開する談話のパターンが第4ラウンドでは12例みられた。

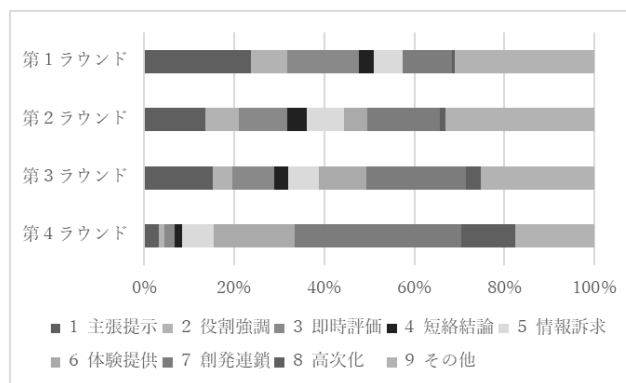


図1 発話の傾向の変化

【断片1】と【断片2】は、その変化を端的に表している。第1ラウンドでテーブル4の成員Nは、話題であった「神楽」を「難しい」と即時評価している(【断片1】)。第4ラウンドで4名の成員がテーブル4に帰還してからの会話では、Pの「たとえば」に対して、N, M, とともに、「あー、もう」「そしたら」「そうね」と創発的な会話を組織化している(【断片2】)。

【断片1】 主張提示と即時評価が隣接するパターン

- 1-4-1-088. N: うーん。だからねあの、神楽とね、まあそこ体育館あったから、神楽とあれして、そのあと、ホテル見て8時頃から。
- 1-4-1-089. M: あー神楽ね、いいけどなあ、神楽。
- 1-4-1-090. N: 前はね、まあでも神楽はちょっとね難しいけどね、もう。
- 1-4-1-091. P: むつかしいっていうのは、人が、いない?
- 1-4-1-092. N: うんうん。だって夜から、ま例えば、ちょっとした、飲食も、ほしいし:::

【断片2】 体験提供と創発連鎖が隣接するパターン

- 1-4-4-015. P: たとえば芝生をドーンと敷いとくだけっていうような、そこに屋台をもってきたりとか、テントを敷いたりとか、そんなカタチ:::
- 1-4-4-016. M: あー。もう更地にする。
- 1-4-4-017. N: そしたらまあ食材は大きな冷蔵庫でも、ちゃんと置いとけば週末に来て、今だからそれは毎週末でもいいし、いろんな、ね、ラーメン、とかおでんとかだけじゃなくて、いろんな人がたとえばサンドイッチとかホットドッグとか、ね、あれもおもしろいかもわからん。あと、いちばん向こうではね、クラウドファンディングとかね、一人5万円集めて一生入り放題にして、たら100人なら(笑) ちょっとね1年で500万。それで金を、集めようとかいって。
- 1-4-4-018. M: そうね、クラウドファンディングで。

主張提示を起点に談話が構成されるパターンの多い第1ラウンドが、席替え後の第2ラウンド、第3ラウンドでは、体験提供を起点にする談話の構成パターンに変化していることがわかった。また、その体験提供の発話は、すくなくからずの場合において、創発連鎖の起点になっていることもわかった。

たとえば、【断片 3】は、その例の一つである。第 2 ラウンドで、Xのいるテーブル 6 に、席替えしてやってきた成員 3 人のうち、Qが発話した話題に対して、Pが体験を提供している。Pの体験の提供は、この話題を展開させ、創発が連鎖するきっかけになっている（【断片 3】）。

【断片 3】体験提供が創発連鎖の起点となるパターン

- 1-6-2-016. Q: あおう、まあ、キャンプするならそんなま、キャンプ場でそこからすぐ使えてあとこの近辺の、農家の人、野菜を提供してもらってそれを調理する。山のも元手いらん。
- 1-6-2-017. P: それわたしのグループでも出ました。なんか手ぶらでできるキャンプって流行ってるけど、手ぶらではできるけど野菜はこう、ここでこの町で調達して、
- 1-6-2-018. Q: だって野菜なんかねゼツタイ、もいですがおいしい、キュウリにしてもナスビにしても、アクが出たらねえ、あんまりじょうずじゃないけえちといかかんけど、であんまり市内のスーパーでからデパートでも、地下の食品売場やらその日の野菜じゃない。
- 1-6-2-019. X: 今の、あの野菜、収穫みたいなのと、農家の手伝いみたいなもの、もしかしたらプランができるかもしれない。
- 1-6-2-020. Q: 農家体験、体験。
- 1-6-2-021. X: 体験プランがね、うん。おもしろいです。困ってる農家なんで、へへへ、イゲてます。

席替え前のテーブルで会話した体験を席替え後のテーブルに提供する体験提供は、どのような機序をもつのか。なぜ創発連鎖の起点になるのか。分析Ⅱでは、「体験提供」の起点的な役割について検討する。

2. 分析Ⅱ

会話を 4 つのラウンドに分ける 3 回の席替えで、25 名の出席者は 6 つのテーブルをランダムに移動している（図 2）。たとえば、第 1 ラウンドのテーブル 4 の 4 人のうちのひとり、Nは、第 2 ラウンドでテーブル 2、第 3 ラウンドでテーブル 1 を経て、第 4 ラウンドでテーブル 4 に帰還している。分析Ⅱでは、体験提供発話の、語りの視座に着目し、その語用を検討した。以下にその結果を示す。

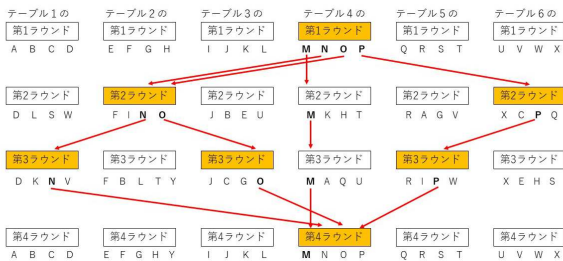


図 2 成員の席替え

第 2 ラウンド以降、いずれもラウンドの冒頭で体験提供が発話されている。いくつかのテーブルではラウンドの終盤でも体験の提供が追加されている。この体験提供の発話は、第 2 ラウンドから第 4 ラウンドまで

で、計 87 例みられた。「ウチのテーブルでは」と語用されたり、「前のテーブルでは」と語用されたりしているその表現を弁別するなら、全 87 例は、時間表現、空間表現、話者表現、曖昧表現の 4 つの弁別される（表 4）。

この前置表現は、ラウンド別に傾向をもつ（表 5）。時間表現は第 3 ラウンドに多くみられ、空間表現と話者表現は第 2 ラウンドに多くみられ、曖昧表現は第 4 ラウンドに多くみられた。

表 4 体験提供の前置表現

コード	定義	語用の例
1 時間表現	時間に着目した体験提供の前置もしくは後置。	「最初」「今」「前のテーブル」など
2 空間表現	場所や境界に着目した体験提供の前置もしくは後置。	「ウチ」「このテーブル」「いちばん向こう」など
3 話者表現	話者に着目した体験提供の前置もしくは後置。2つのタイプがある。 - 自陣表現タイプ（「ぼくら」など） - 特定人物タイプ（「Jさん」など）	「ぼくら」「わたしたちのグループ」「Jさん」など
4 曖昧表現	体験元の限定性を省略した体験提供の表現。2つのタイプがある。テーブルクロス落書きを直接参照するものもここを含む。 - 「みんな」タイプ - 「話した」タイプ - 落書きの参照	「みんな」「話した」「言っていた」「そういう感じになった」「書いてある」など。

ラウンドの遷移からみると、話者表現・空間表現から、時間表現を経て、曖昧表現へと、その傾向が変化している。

表 5 ラウンドごとの体験提供の前置表現

カテゴリー	タイプ	第 2 ラウンド	第 3 ラウンド	第 4 ラウンド	小計	計
1 時間表現		3	9	1	13	13
2 空間表現 (時間と同時に表現している 2 例を含む)		11	8	6	25	25
3 話者表現 (時間と同時に表現している 1 例を含む)	自陣表現	8	5	1	14	26
	特定人物	5	3	4	12	
4 曖昧表現	「みんな」	1	0	5	6	23
	「話した」	3	0	8	11	
	落書きの参照	0	1	5	6	
計		31	26	30	87	87

体験を提供するときの前置表現は、発話の引用の参照元をどのように認知しているか、もしくは他者に示すかを表しており、その変化に連動して、それに続く応答者の応答も変化している。体験提供に対しての応答では、第 2 ラウンドでは主張提示の応答が多くみられ、第 3 ラウンド以降では体験提供に続く体験提供の連続や創発連鎖の応答が多くみられた（表 6）。

「前のラウンドでの談話の体験を語る」発話が、「わたしのいたテーブル」、「前のテーブル」、「多くのテーブル」と参照元を、明確な話者表現から、空間や時間の表現に置き換え、さらにはそれを曖昧化させていくことが、席替えを契機として起きている変化である（図 3）。

表 6 体験提供の前置表現への応答

発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	7	0	1	8
2 役割強調	1	0	0	1
3 即時評価	5	2	1	8
4 短絡結論	3	1	0	4
5 情報取得	1	1	0	3
6 体験提供	6	13	14	33
7 創発連鎖	6	9	10	25
8 高次化	0	0	2	2
9 その他	1	0	2	3
計	31	26	30	87

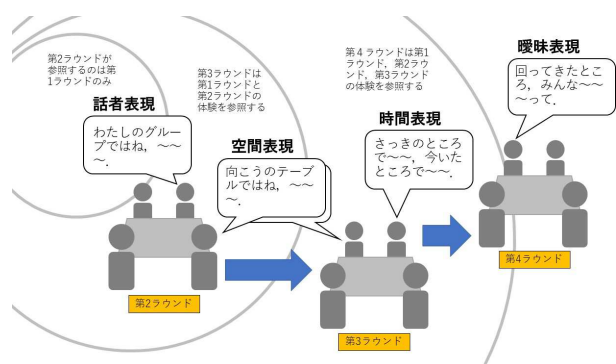


図 3 体験提供の前置表現の変化

ワールドカフェのプログラムは、席替えを契機に3つの変化をもたらす。これは、席替えによって区切られたラウンドが進むにつれて、談話が「体験の提供」として運ばれ、そのテーブルでの会話の文脈が、別のテーブルの会話の文脈と交差するときに段階的に起きる変化である。一つは体験を運ぶ行為が成員間で連鎖的に増加するという変化、一つは体験が運ばれるにつれ参照元が曖昧化するという変化、結果、主張が後退し、創発的な会話に置き換わっていくという変化の3つである。

これらの機序が、このフィールド特有のものであるかどうかを検証するため、二つめのフィールド「対話と学習のワールドカフェ」を対象に、同様に、発話カテゴリごとの変化、相互行為としての応答パターン、前置表現の変化を分析した。その結果、概ね同じ分析結果が得られることを確認した。

4. 考察

1. アコモデーション

話しあい是一个の集会的達成である。その困難さを合意形成学がひもといている（たとえば、Susskind, 1999 など）。猪原（2011）もいく通りもの困難さを挙げているがたとえば「紛争における合

意形成」では、問題は3つあるとして、1) 科学的な予想に関する問題 2) 価値判断の対立 3) 感情的な対立と枚挙している。「意見の一致」を目指すコンセンサス (consensus) としての合意形成だけでなく、「意見の共存・共生」を目指すアコモデーション (accommodation) の概念も提唱されている（たとえば、Checkland, 1999）。

席替えによる、視座の変化と談話の文脈の交差が、参照を自由化し、個々の主張の対立を解体し、集会的達成として、その成果を再構成的にもたらすなら、一合意形成のみがその目的でないにせよワールドカフェのそのあり方は、合意形成的である。

ワールドカフェの席替え (move to other tables) の要諦を Brown & Isaacs (2005) は、「他花受粉 (cross-pollination)」と呼称し、「異なる視点のつながりをもつ多様性と密度を意図的に強めることにより、生体システムがもつダイナミズムを活用し、創発を引き起こす」と述べている。分析 I および分析 II で明らかになったのは、成員が、「わたしのいたテーブル」、「前のテーブル」、「多くのテーブル」と参照元を拡張もしくは曖昧化させていく営みである。これは、「多様性と密度」が文脈のバリエーションにおいて高まり、「ダイナミズム」が活用されるさまでもある。それをもたらしめているのが、「前のラウンドでの談話の体験を語る」発話であり、そのきっかけになっている席替えは、「他花受粉」の中核をなすといえる。なおかつ、体験を運ぶ行為が成員間で連鎖的に増加し、運ばれるにつれ参照元が曖昧化し、創発的な会話に置き換わっていった状態は、「相互学習、相互理解によって」探索される「異種の情報が融合し、発想を固定化しない多様な価値観が併存する状態」(猪原, 2011) と表されるアコモデーション状態そのものではないだろうか。

2. 社会実践

ワールドカフェを実践からひもとくなら、その目的は、4つに大別されると考えられる。1) 本来の組織学習（あるいは理解の促進）、2) 社会的認知の共有化、3) 知識生成（イノベーション）、4) 合意形成の4つである。この、学び、共有化、創発、合意といった成果（の成分）は、それが全編にわたって目的として目指されるのではなく、どの目的のワールドカフェであれ、まず対立の解体としてアコモデーションの状態としてもたらされ、終了目前の最終ラウンドで、学び、もしくは適応や創造として、一意に抽出されて成果と呼ばれる

ものに「特定される」のではないだろうか。Brown & Isaacs (2005) はワールドカフェの目的を、「集合の知恵を視覚化して行動の優先順位を特定する」としている。これを、この考察を経ては、「集合の知恵を視覚化してアコモデーション状態をもたらす、その価値観群から、成果を特定する」と読み替えてもよいのではないだろうか。

そして社会実践においてむしろ、ワールドカフェ的でない会合において、単一化された目的のみに沿おうとしていたことが、学び、適応、創造を阻害していたということはないだろうか。

5. 今後の課題

今後はこの考察を推し進めつつ、ワールドカフェの実践に、学びに関わる既存の概念から深耕する検討に取り組みたい。例えば、文化的透明性概念 (Wenger, 1990) や拡張による学習および胚細胞モデル (Engeström, 1994) などからの検討である。

Wenger が 1990 年に提示した文化的透明性概念を、伊藤 他 (2004) は、「実践共同体の具体的な活動の意味や、共同体としてその活動の目指すことの意味が、実感として理解されてくること」と読み解いている。また、「実践共同体に参加している人たちが互いに関係を切り結んでいく中で、あるいは、諸々の活動のためのリソースや道具に囲まれた中で展開している「世界内存在」としての私たちの学習の本来の姿はどのようなものかという、いわば学習のプロトタイプ・モデルを提示したものである」とも述べている (伊藤 他, 2004)。

研究の課題として、ワールドカフェに招かれた者たちという (臨時的、極めて短期の) 「実践共同体に参加している人たちが互いに関係を切り結んでいく中で」「共同体としてその活動の目指すことの意味が、実感として理解されてくる」ことがワールドカフェにおいて実現しているのであれば、そこにある「席替えの機序」は、「学習のプロトタイプ・モデル」を示すことができるのかもしれないという視座からの分析に着手したい。

Engeström (1994) は、学習のための方向づけのベースを 5 つのタイプとして提示している。1) 例示 2) 先行オーガナイザー 3) アルゴリズム 4) システムモデル と続くその 5 つめが、5) 胚細胞 (Germ model) で、これは、「複雑なシステムを理解するための、シンプルで基本的な原理」であるとしている (1994)。また、

創造的であることを学ぶには、人は触発され、開放的なムードの中にいなければならないとも述べている (Engeström, 1994)。

「触発され」るような「開放的なムードの中」で、「単一化された目的」としての成果が「特定される」前に、まずアコモデーション状態として価値観群が共存する状態を胚細胞的であるとみなすことはできないだろうか。その機序について分析することにも着手したい。

文献

- [1] Brown, J., Isaacs, D. (2005) “The World café: Shaping Our Futures through Conversations that Matter”, Berrett-Koehler Publishers, Inc. (香取 一昭・川口大輔 (訳), (2007) “ワールド・カフェ カフェの会話が未来を創る”. ヒューマンバリュー.)
- [2] 国際ファシリテーターズ協会日本支部, (2015) “ワールド・カフェ ハンドブック”. ワールド・カフェ 20 周年記念日本イベントーワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来ー, 国際ファシリテーターズ協会日本支部.
- [3] O'Connor, M., & Cotel-Gibbons, L, (2017) “World Café: A proactive approach to working with mentors”. *Nursing Management*, 24(2), 26-29.
- [4] 中西 昭人・高階 利徳, (2017) “ワールド・カフェによる症例検討の有用性とその評価”. *医療薬学*, 43(2), 111-119.
- [5] Holman, P., Devane, T., Cady, S, (2007) “The Change Handbook: Group Methods for Shaping the Future”. Berrett-Koehler Publishers.
- [6] 富田 英司・丸野 俊一, (2005) “曖昧な構造の協同問題解決における思考進展過程の探索的研究”. *認知科学*, 12(2), 89-105.
- [7] 藤本 学・大坊 郁夫, (2007) “小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響”. *実験社会心理学研究*, 47(1), 51-60.
- [8] 片桐 恭弘・石崎 雅人・伝 康晴・高梨 克也・榎本 美香・岡田 将吾, (2015) “会話コミュニケーションによる相互信頼感形成の共関心モデル”. *認知科学*, 22(1), 97-109.
- [9] Susskind, L.E., (1999) “The Consensus Building Handbook: A Comprehensive Guide to Reaching Agreement”. SAGE Publications Inc.
- [10] Checkland, P. B., (1999) “Systems Thinking, Systems Practice, 2nd ed. ”. John Wiley and Sons.
- [11] 猪原 健弘, (2011) “合意形成学”. 勁草書房.
- [12] Wenger, E., (1990) “Toward a theory of cultural transparency: elements of a social discourse of the visible and the invisible”. Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- [13] Engeström, Y., (1994) “Training for Change: approach to instruction and learning in working life”. International Labour Organization. (松下 佳代・三輪 健二 (訳), (2010) “変革を生む研修デザイナー仕事を教える人への活動理論”. 鳳書房.)
- [14] 伊藤 崇, 藤本 愉, 川俣 智路, 鹿嶋 桃子, 山口 雄, 保坂 和貴, 城間 祥子, 佐藤 公治, (2004) “状況論的学習観における「文化的透明性」概念について: Wenger の学位論文とそこから示唆されること”. *北海道大学大学院教育学研究科紀要*, 93, 81-15